別府歴史散歩（一）

北石垣の西域コース

日名子　洋一

別府史談会が発足して、別府市内歴史探訪会がスタートした。第一回は亀川内竈方面を実施し、第二回は石垣原古戦場の探訪を計画したが、雨で中止となった。

その後、探訪会が途絶えていたが、平成六年、私が探訪会の担当となって、再出発した。

第三回探訪会は、県の文化課により鬼の窟古墳の調査が行なわれ、両古墳内に装飾があることがはっきりし、また、実相寺古代住居の三回目の復元が完成したので、ここをメインとしてその周辺の遺蹟史蹟の見学を計画し、五月二十二日に実施した。

市内探訪会は、毎年五月に行なうことになったが、探訪会の資料を「史談」に紹介して、これからの利用に供したいと考える。

一　目歯頭地蔵

〔中部地区公民館から北西へ六〇㍍〕

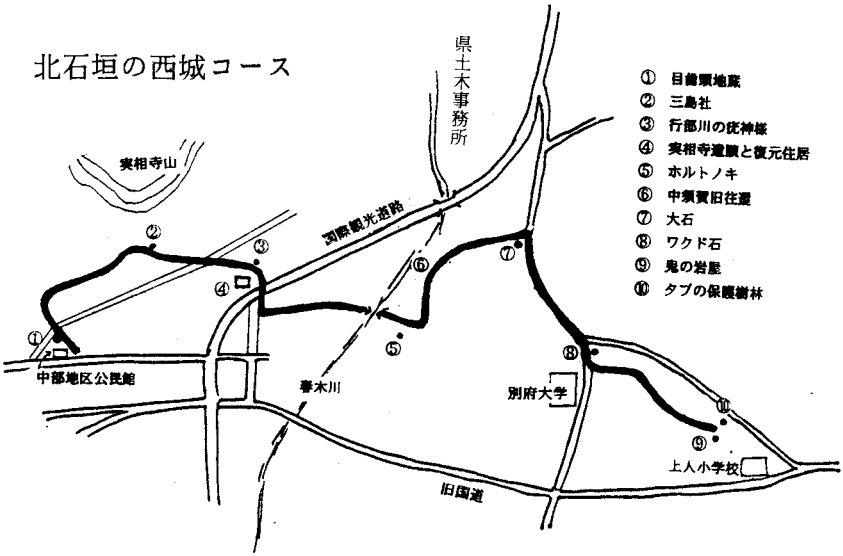
○場所　実相寺三の四組

○目歯頭の地名

目歯頭の地名は、大字鶴見・大字北石垣に跨がり境界を挟んで現存している。ここの地蔵堂は鶴見の目歯頭で境界線上にある。ここの道から下は大字北石垣の目歯頭になるが、下の方の目歯頭の一部は住居表示で石垣西八丁目という町名になっている。

目歯頭の地名は身体の一部を表現しているが、、国東町（旧小原村）ではメハズと片仮名書きで、挟間村（旧高崎村）では女狐と表現され一定していない。したがって、地形を示した地名と考える。

○地蔵板碑



この石殿（総高一五三㌢）、中の本尊（四体）は板碑（高六〇㌢・幅五七㌢・奥行一八㌢）で浮彫りにされている。たぶん六地蔵信仰が後年にもたらされ、何かの理由で向って右側の二体が切断されたのであろう。　平安後期の作といわれるが、学術的には確定していない。

●六地蔵信仰　地蔵は地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上と六道の衆生を救済するものとされ、室町期より六道に一体ずつ配した六地蔵信仰が盛んとなった。

市内には、赤松石幢（せきどう）（市指定有形文化財）や長松寺（ちょうしょう）の山門横の六地蔵石幢などがあるが、板碑型は珍しい存在である。境内に多くある五輪塔は、地元の無縁塔が逐次に集められたものと思われる。

○地蔵の祭日

この地蔵尊は古くから信仰され、毎年八月二四日の地蔵盆の日に地蔵講が催され、青年団があった時は小字荒屋敷の製麺所からヤセウマを仕入れて、これをお接待としていたが、地元の青年団の構成メンバーの減少により

廃れたといわれている。

●往還

目歯頭地蔵の下の東西の道路を通称で「往還」といわれている。この道（一、八㍍）は幕末までは、豊前（小倉）街道といい伝えられていた。

明治政府は、道路を往還と道と路の三種に区分した。この街道（二等往還・日暮庵～境川小～鶴見ケ丘高～目歯頭～実相寺遺蹟～新別府橋下～別府大学上を経由）は国際観光港道路カーブ点・春木川畔の左岸・別府大学西の三地点で説明するが、平田～野口間を結ぶ江戸時代の主要道であった。

その後、明治九年に旧国道が開通し、昭和に海岸線に国道十号線が開通され、この百年間の道路の変遷が実感される。

二　三島社

〔目歯頭より北西三七〇㍍〕

○場所　実相寺三の二組

○三島社の由緒

三島社の由緒書きは、過去の戦禍で古文書が消滅したので創建は不祥。又、江戸期の灯篭の寄進者は原中村庄屋であり、同村の鎮守として祀られ、更に地元有志の家系図では享保二（一八〇二）年、明治一二（一八七九）年にそれぞれ三島社改築の記録がある。

祭神は、三島社は大山積命で、摂社として水神社（竜神）は、弥都波酒売命（みずはめのみこと）である。

○三島社の祭日

祭日は、春が三月二六日、夏が七月一七日、冬が一二月三日で、水神社の祭日は七月一七日である。

○三島社の社名説

河野氏の氏神（隣接町村では山香町・立石の三島社や同町山浦の三島社など）説と、この鶴見が江戸期に豊後森藩の所領であったので久留島藩の先祖（伊豫河野家）の守護神・三島社（明治三九年の神社合祀令により大正元年八月二日に火男火売神社に合祀された鶴見・照湯の三島社の例）の二説がある。なお、三島神の家紋は久留島藩主と同じナンキンである。

○無格社の維持

明治六年に旧格付社（鶴見では郷社火男火売神社）が一村一社で指定され、更に無格社（鶴見では角田の稲荷社・照湯の三島社・竹ノ内の秋葉社の三社）が明治三九年の神社合祀令の影響で強制的に合祀されたが、ここの小字下森山の三島社だけが存続した。

一般的には、経済的理由（神職の存在・社殿の維持修理）と信仰の対象（水源祈願）が挙げられるが、この三島社の場合は、大正年間の合祀危機や戦後の農地法による自作農創設（社有田の強制買収）にも耐えられたのは、実相寺山の山麓一帯の湧水源に関連した信仰に支えられたと思われる。

○湧水池と公民館

社殿の南側に実相寺町公民館があるが、ここは湧水池（中央の岩上に水神社が祀られていた）を埋め立て、民有地と併せて公民館（広さ一五六平方㍍）が昭和四四年に新築された。明神川の水源（三島明神）として流域の南須賀地方（井田・是定の両集落）の農家を含めた水利組合が運営された。しかし、石垣第二区画整理事業の進行と伴に水田が宅地化したことが遠因であろう。

なお、水神社は平成四年十一月に付近で復元された。

●三島社の奇水（半夏水）

実相寺山麓東側は隣接の他の扇状地地形と違って、水源は年間湧出するのでなく、その期間は苗代期（五月）から十二月迄と限られていて、他の月々は渇水期となることに特徴があった。このため、市内の水不足の年は明神川流域の田植えが終わるのを渇水期の目途にされていた。市街地が進む現在では認識され難いが、水神の信仰がこの三島社にこめられた意義が理解できる。

三　行部川の疣神様

〔三島社より北西へ七〇㍍〕

○場所　実相寺二の一組

三島社と同じく「字下森山」であり、道を隔てて「市の原」との間に行部川が流れている。疣神様は、この川左岸の道上にあったのが、里道の拡幅で現在地に移転さ

れた。なお、「小字行部・行部川」の地名はここから二百㍍下流にある。

この行部川の湧水源は上大畑で、冷川の湧水源は馬場の「小字水車」となっている。

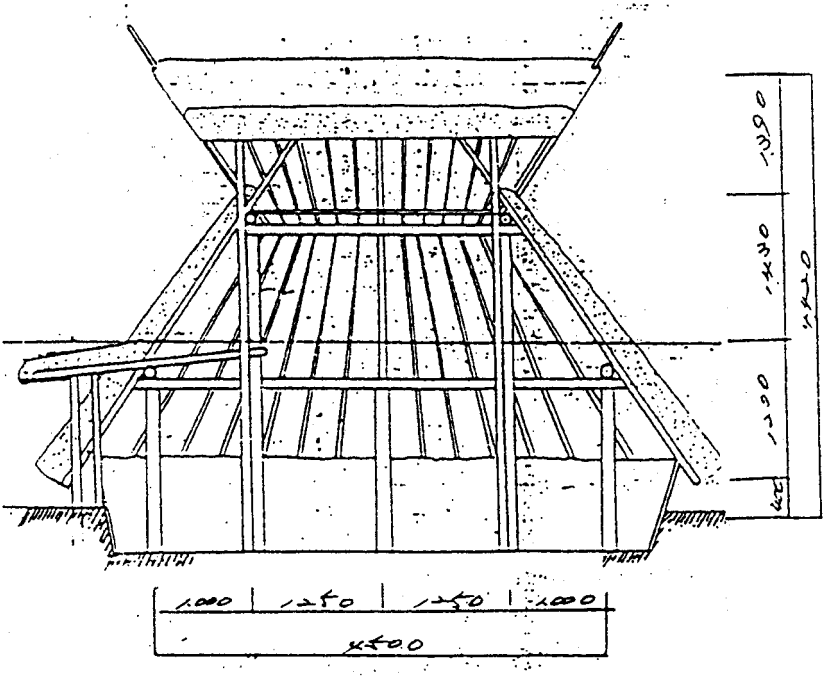
○疣神祠の由緒

普通の神社の拝殿は、無格社の場合は銅葺屋根か石殿型であるが、ここは板碑（高九九㌢・幅八〇㌢・奥行二三㌢・石材安山岩）が露出して、大変に素朴である。また、祭神も祭日も不祥。由緒に関する伝承も殆ど残っていない。

●疣取り祈願と風習

ここの疣神様で伝承されているものは、疣取りの風習（祈願者の年令の数の小石を祠に載せる）である。

疣といっても目疣から手の甲迄と千差万別であるが、素朴な素人治療もしないで祈願すれば治ると伝承されている。市内の農村部では戦前は、茄子を半分に切って疣に擦るとか、カタバミを擂鉢で粉にして疣に擦り付けるとかの風習が伝えられている。



四　実相寺遺蹟と復元住居

〔犬神様から北西に七〇㍍〕

○場所　春木五の二組

○次郎塚・太郎塚・（鷹の塚）古墳

六世紀末から七世紀はじめにかけての古墳である。

太郎塚から出土したといわれる唐草文透彫鏡板（馬具で轡先（くつわ）のの金具）は、外縁は金具で鋲止をして、金銅製の華麗な仕上がりを見せており美術的にもすぐれている。六世紀末から七世紀前半のものと考えられる。

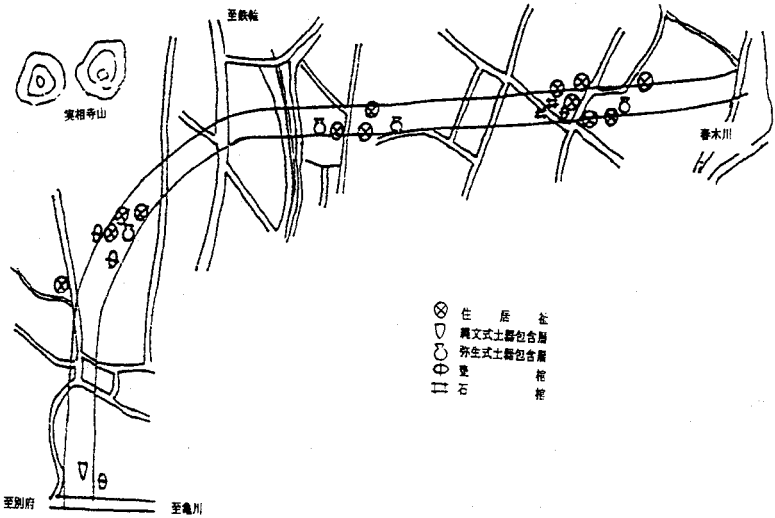
（市立美術館蔵）

●古代住居復元

昭和二八年より三一年にかけれての国際観光道路建設工事の時に発見された住居祉を、復元したもので、県下でももっともすぐれたものである。

竪穴式（西側）と平地式（東側）が二棟ある。時代はいずれも弥生式文化時代で、吉野ケ里遺蹟と同時代のものである。

国際観光道路工事遺蹟図



五　ホルトの木

〔実相寺遺蹟より北西四〇〇㍍〕

○場所　中須賀七組

○市指定保護樹

春木川流域に発達した自然林を構成する樹木で、今では屋敷林の一部として保護されている。ホルトノキは二樹あって、一樹は胸高幹囲二四五㌢・樹高約一五㍍、その西側に一樹あって胸高幹囲一八五㌢・樹高約一八㍍、西に出た枝が切られ樹形が少し損なわれている。東側の樹の枝張りは、東八、五㍍・西七、三㍍・南七、〇・北八、五㍍で樹形が整い樹勢も盛んである。

六　中須賀旧往還春木川畔

〔ホルトノキより北西へ一三〇㍍〕

○場所　中須賀元町五の二組

○春木川の急カーブ点

春木川は、国際観光道路の新別府橋までの上流は緩(ゆる)やかなカーブで谷が深く堤防がない地形であるが、この地点から大きく東南にカーブし、春木橋（旧国道）付近から谷がなくなり堤防が必要となる地形である。

なお、東南に斜降する川筋は石垣東十丁目六番の北西端（旧小字九日田(もうひでん)）で、ここから海岸線まで川筋が一直線となる。

○往還筋はここの川を川底まで下って川中を渡渉していた。ここは、「小字向の原」と「小字元林」の境で、この間の里道を別府大学の上までを経由して豊前街道（往還）が通っていた。

●大字境界

ここから大石迄の道が「大字鶴見」と「大字北石垣」の大字境である。道の下は「小字元林」で道の上は「小字下田井」である。

七　大石

〔中須賀旧往還より北西へ一三〇㍍〕

○場所　桜ケ丘八の一組

●巨石信仰

市内の丘陵部には乙原の立石山や、野田の姫山の両メンヒルがある。又、市内の扇状地部では、この大石や、朝見の鬼面石や、扇山の尖り石が有名である。

○道標

この大石は、鉄輪と平田と中須賀との道路の三叉路にある。また、この下のワクド石（別府大学角）や、一本松（旧国道の平田橋詰）や銭瓶石（浜脇の銭瓶峠）などは交差点にある。道標は大きくて、遠くから見える対象物（自然石・加工石・樹木）が多い。この大石は一番大きい自然石である。現在では家が建て込んで市道・照波園平田線からは見えなくなってしまった。

かつて、大石の上には小さな石殿があり「大将軍祠」だといわれていましたが、今はなくなっている。

●加藤翁頌顕碑

加藤新平は南鉄輪村の与頭で、現在の鉄輪温泉常盤屋の先祖である。文化一二年に生まれ、幼名を金太郎といった。教養も深く書画を好み「直村」・「鼎山」と号した。また、俳号を「秋波」と称し点茶・生花の素養もあった。

新平は南鉄輪村の与頭（組頭）を長年努め、庄屋邨彦をよく補佐した。維新後は南鉄輪村の保長となり、のち邨彦に代わり副戸長・戸長を努めた。

当時、南鉄輪村・平田村・北石垣村の三村の分岐点であった大石付近（桜ケ丘地区）は交通の難所であった。戸長新平は私財を投じて道路の拡幅工事を行ない交通の便を図った。大石の傍らに建つ顕碑はその功績を讃えている。

●松本井路と湯川原井堰

大石の下の市道・照波園平田川線の南側に沿って松本井路がある。昭和三五年頃から高度成長により、田園が徐々に都市化したので、今では排水路化してしまった。

春木川右岸の南須賀・春木地域が湧水に頼っていたのに比べると、春木川左岸の中須賀・上人地区は殆どが井堰によっていたといえる。その一番大きな水路がこの松本水路である。この水源はこの三叉路から平田川を二百㍍程上がった箇所にある。

なお、この「大字境」は四つの大字（北石垣・亀川・鉄輪・鶴見）の接点になり「大字北石垣・小字湯川原」は平田川を挟んで長三角形（舌状）型に突出している。これは境川と同様に水利権の関係で突出したのであろうが、春木川の大字境とは大きく違っているのが特徴である。

●湯川原と温泉

北石垣の自噴温泉は小字地名（「小字湯川原」と「小字汐湯」）が示すように、湯川原井堰の左岸に共同の温泉（自噴）があった。戦前の南須賀や春木の人々は、五右衛門風呂を各戸ごとに沸かしていたが、中須賀の人々はこの湯川原温泉を利用していた。別府市へ合併条件の一つとして、市有の十万地獄源泉の引湯を利用して、北石垣の各地に区営温泉が設置されている。

八　ワクド石

〔大石より北西へ二一〇㍍〕

○場所　上人西六の一組

ワクド石

この石の呼び名「ワクド」とは豊後の方言で、「蛙」の形に似ていることから言われるようになった。現在は所有者の自費により、毎年二月に神式で祈願している。

●自然石と道標

ワクド石は、自然石のままで人が整形したあとが見られず貴重な存在である。なお、県道・別府田代線（浜脇河内）にあった「尖り石」が拡幅に伴い、消失してしまったので是非残したいものである。

この地点は、市道・照波園平田川線との三叉路で、幕末までは豊前街道の「四辻」であったので、道標として人々にワクド石と呼ばれ親しい目印になったのである。

●円通廃寺伝説「小字円通寺」

空也上人のゆかりの円通廃寺は昭和三年に上人ケ浜公園西北角に記念碑が設置され、お堂が同公園北海岸部に建設されたが昭和六二年空き家になった。学術的な遺構

や出土品の発掘はない。その御本尊は中須賀の曹源寺に預託されている。

地名の「小字円通寺」は、このワクド石から別府大学西側のライン（旧往還）の東二百㍍の一帯が、円通廃寺の可能性があると伝承されている。

○円通寺遺蹟

昭和二四年に鶴見丘高校の部活の史学部の生徒が、「小字円通寺六二番地」（現在別府大学校内）で組合せ石棺を発掘した。これは、次郎太郎塚より鬼の岩屋ラインの古墳群はその中間に旧往還を上下して実相寺遺蹟・円通寺遺蹟と連続していたことが想像される。

●平田川急折地形

平田川は「大字鶴見・大字鉄輪」の間の上流を八川というが、大石では春木川との距離が百五十㍍と急接近している。境川と板地川の例のように合流してもよい地形である。それが岩盤の関係か、又、ワクド石のような巨岩を内蔵した地層が台風のような激流を跳ね返しているのか。今後の学術的な研究を待たなければならない。

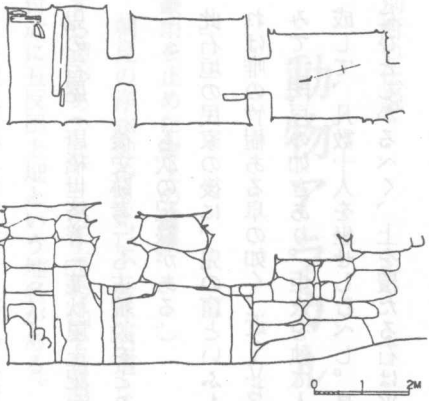
地形としては、ワクド石から大きく北東へカーブして海岸線（市姫神社～春木川公園の間）では、一、八五㌔も離れている。これにより上人が浜に砂がなく小石の多い海浜となっている。これが磯や瀬に棲息する根付魚に不利な海底条件を形成して、北石垣の浜に漁業が育たない影響を形成したように思える。

●大字境界

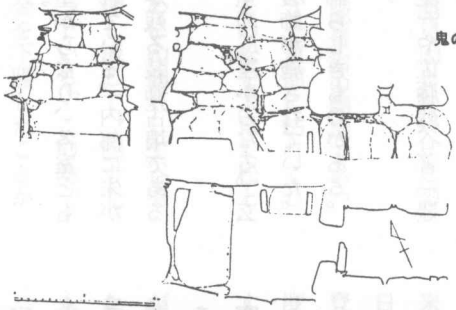
ワクド石と隣接する別府大学体育館との間が「大字北石垣・小字円通寺」と「大字亀川・小字論田」との大字境である。ここから平田川筋から離れて上人小学校校庭北側～平田天満社の南側～北部地区公民館北側へのラインと大字境は斜行していた。なお、昭和四一年度に住居表示で、新町名（照波園・平田町）の財産表示（番地は従前の番地）となったので、大字境は消滅した。

九　鬼の岩屋古墳　（国指定文化財）

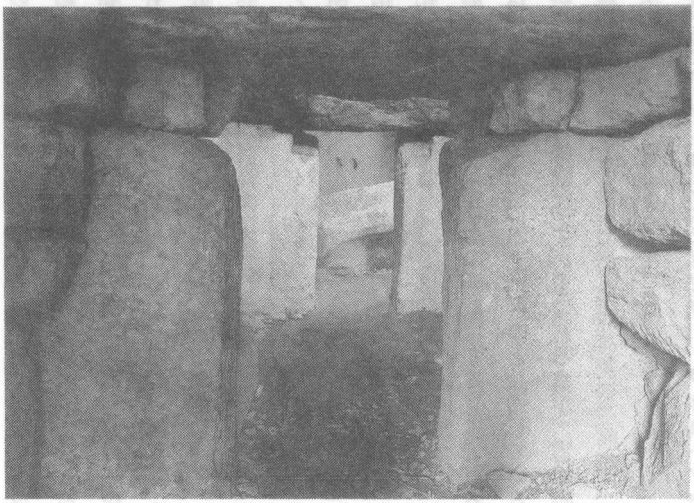
〔ワクド石より北西へ四五〇㍍〕



鬼の岩屋１号墳石室実測（賀川光夫報告書より）



鬼の岩屋第２号墳石室実測図（宮野和夫報告書より）



鬼の岩屋第１号古墳　（別府市教育委員会）

場所　上人西一四組
築造年代　六世紀末（推定）

●一号墳　石室は羨道・前室・玄室からなり、各室とも安山岩の巨岩を組み合せて造られている。内部に朱が塗られていた。前室には鋸歯文が残る装飾古墳である

●二号墳　奥行約八㍍　羨道・玄室の二室からなる。玄室の天井の高さ約四㍍　円形の装飾が施されていた。また、玄室内の台部の前面に装飾らしきものがある。

鬼の岩屋（唐橋世済著「箋秋風土記」や佐藤鶴谷著「豊後史跡考」も古墳説をとり、小浦村の脇蘭室も次の記録がある。）

此石垣の民家の後に、鬼の窟といふものあり。外より見れば唯の竹樹ある阜の如く、近く立ち寄れば、巨石をたゝみて、門戸の如きあり。炬火を執て入るに、石窟を構え成して、凡数十人を坐せしむべし。高さも大概径の丈尺にひとしかるべく、上を覆たる石は平なる大石を並べて、人力にはあたふまじと見ゆる者なり。是を男鬼の窟とす。女鬼の窟も相並で在り、石門の狭隘なるより入るに、二室あり、奥なる方稍広くして、一石牀を側立、土俗是を女鬼の産臺と云傳ふ。何の世に造り、何の用なる事を知るものなし。上代穴居の遺物にや、或人の説は、古昔豪酋を葬たる石窟ならんと云う、女窟の中の石牀は石棺なるかもしらず。上国にも西州にもかゝる類いありて、石窟と云傳る者聞かば、さに非ずとも云いがたし。

一〇　上人小学校のタブの木

場所　上人小学校後庭
市指定保護樹
昭和五五年七月指定

校庭の鬼の岩屋一号古墳の南西側にある立木である。巨木は少ないが、樹種が古墳上のものと共通している。したがって、世代は代わっているであろうが、古墳時代から続いてきた貴重なものである。

●タブのキ　●クスノキ　●エノキ
●アラカシ　●クロガネモチ　●ホルトノキ